

ニホン英語 (Open Japanese) の類型化研究 (語順編)

末 延 岑 生

はじめに

在日ネイティブ・スピーカーの英語教師にたずねた。

私：「先生、「I you love.」といえはネイティブ・スピーカーには通じないでしょうか。」

先生：「絶対通じません。」

私：「“love I you.” もダメでしょうか。」

先生：「絶対に通じません。」

私：「ではどういえばいいのですか?」

先生：「“I love you.” に決まっているでしょう。それに第一、あなたの発音もネイティブ・スピーカーには絶対に通じません。全部ひっつけて素早くこう発音するのです。[ailvju:] って。でないとイライラするのです。」

語順は、英語文法では従来、文生成においてあまりにも重要視されすぎてきた。たとえば、安井稔(安井2001)によると、「英語の文法の中核をなしているのは何であるかということ、それは固定した語順である、と考えることができる。」というように、語順は英文法の中核であり、さらに不変の真理としてゆるぎないものと位置づける。

英語使用において語順を間違えることは致命的で、それはメールアドレスを間違えるのと同じで、絶対に意味が通じないというのが通説となっている。いちいち書名を挙げるまでもなく、書の筆頭に語順の厳格さを説かない英文法書はない。そのために学習者の多くが発話に際して語順のことを考えると、第一声が出ないのではないか。

そのような通説を再考察するために、文法家ではなく言語教育者、さらに学習者の立場から語順をとらえ、形態編(末延2012)に続いてここに一論文を書き留めるにはいささかの価値があると考えた。

第1章 語順と誤文

人は外国語を使うとき、母語の語順を意識しないでは発話できない。語順は使用者の言語文化を最も重く背負っているからだ。だからそれだけに語順の意義は軽視できない。中

でも中国語のような孤立語は格変化もなく、語順が文構造を決定する重要な要素として重視されてきた。中国語と文法形態、中でも語順が類似した英語についても、多くの英語文法書では語順のルールは最重要視され、厳しく守られてきた。

一方、日本語ほど語順が自由な言語はないといわれる。その自由度をちょっと意識的に使ってみるといい。聞く側にも話す側にも驚くほど自由があることがわかる。ところが日本語の語順の自由さとは逆に、英語を学ぶ際には一変する。英語は「語順言語」といわれるように、少しでも語順を間違えると致命的で、日本語のようには決して通じないと言われるからだ。とはいえいままでは文法学者たちの仮説の段階でとどまっており、実際にそれに的を絞って大々的に実験し、実証した英語研究者はいない。

では英語を学ぶとき、使うとき、語順というのはそれほどに厳格でなければならないものだろうか。日本人の相手の意を理解しようとする努力と推理力を以てしても、本当に無理なのだろうか。実験、実証をしないでにおいて、英語は中国語のように屈折語でないからとか、格変化がほとんどないから語順による文法が重要だなどという前に、ほんの少し実験をして見ればいい。

毎年4月初めの大学での授業風景。学生が英語に興味を示さない。学生に当てる。
「『私は学校へ毎朝8時30分に来ます。』これを英語で言うてみ。」(クラスに緊張が走る)

「そんなの、急にできません。」

「じゃあ『私は』は英語で？」

“I”

「『学校に』は？」

“school”

「『毎朝』は？」

“every morning”

「『8時30分』は？」

“eight-thirty”

「『来ます』は？」

「ええと… “come”」

「じゃあ、みんな合わせて？」

“I, school, every morning, eight-thirty, come.” (笑い)

「すごい。それで世界中の3分の1、20億人の英語使用者たちがわかる。あとは聞き手が勝手に君らの英語の順番を並べ替えよる。試験の“並べかえ問題”と一緒にや相手にやらせればいい。」

「ほっ、ほんまかいな先生。冗談きついわ。」

「ほんまや。これ、先生が一生かけて言うてきたことや。」

「それでええんやったら俺、今まで英語使うたこと一回もないけど、たいてい言えるで。」

「すごい！」

「カタカナ英語でええんやったら2,000や3,000くらい単語知ってるもん。」

「2,000万円や。大金持ちやんか。」

ことばは、本来、外国語であろうと、自分の言いたいことばから順番に並べること、つまり母語の順序で並べることから始めればよい。日・英両語は、世界の言語の90%以上がそうであるように、基本語順は一般にS(主語)、その後にV(動詞)O(目的語)あるいはOVが来る点で共通している。特に初期の学習では、それが一番落ち着く。

一方、聞き手は規範文法の語順をかき回すこの荒業に、最初はあきれ返ることだろうが、聞き手に並べ替えさせればよい。今まで英語教育は話し手の英語力ばかりに注意を向けてきた。実はコミュニケーションにおいては聞き手の理解力こそが大きな救いなのだ。そのくせ、語順の間違いは絶対に通じないと脅しながら、それでいて文の並べ替え問題を毎回出題する英語教師は、自己矛盾に気づかない。この並べ替え問題というのは、少し英語ができればネイティブ・スピーカー(以下NS)でなくとも解ける。例えば、

Just, and, keep, on, one, trying, you'll get, eventually. (センター試験 1999年)

のような少々難解な問題でも、わざわざ「語順理解度の実験」などと銘打って実験をするまでもなく、日本の英語教育ではすでに何十年も前から全国を挙げて「次の語順を正しく並べ替えよ」という問題が数限りなく出題され、それは結果的には自ら人間の言語の推理力で克服できることを証明してきた。

だから、たとえ日本語の自由な順序で英語の単語を並べたとしても、その逆であっても、聞き手の理解力さえあれば、英米はおろか基本的には全世界で通じる。人間はだれしも潜在的にこれほどに鋭い言語推理力を持っており、本来、この力をさらに磨き上げることこそが言語教育の真髄であるはずだ。

吉本新喜劇の山田花子の「アッ傘降ってきた。雨持っててよかった」というコピーは、文法的には主語と目的語が入れ替わるという致命的な語順であるにもかかわらず、子供だけでなく誰にでも正しく理解されるからこそ笑いの種になる。これをそっくり英語や他の外国語に置き換えても、世界共通の笑いとなる。このことは、語順以前に、日本人のたえず相手の意を解しようとする態度と、持ち前の推理力によると筆者は考える。

さて、筆者が今まで行ってきた数々のニホン英語の誤文の分析(Suenobu 1986-2006)のうち、「ニホン英語の類型化研究-形態編」では、日本人の犯す誤文1,413文中、語順の間違いによる意味不明文はわずか7例に過ぎなかった。この結果は、次の三点のことを意味していると思われる。

まず第一に、語順の少々の違いにさえ目をとがらし、規範文法に厳しいNSといわれる人たちでさえ理解できるから、それほど神経をとがらさずに自然と黙認しているのであろう。しかし、中には“I still watch white and black (→black and white) TV.”(「僕は今も白黒テレビを見ている。」)“My father and mother (→mother and father). The Browns live in a white, big (→big, white) two story house.(センター試験 1994)や姓名の入れ替わった表現などのような日本文化の入り混じった文を誤文とする熱狂的自文化優先主義(エスノセントリズム)のNSや、同じく日本には熱狂的西洋文化羨望主義の文法学者や教師たちが圧倒的に多いとも事実である。

次に、日本人は案外、大きな意味の取り違えをするほど英語の語順を乱さないで使っているということだ。しかし、実際はどうだろう。私たちの先輩たちは世界を舞台に、使う本人には気づくことなく、相当なエネルギーで規範文法からはみ出しながらも、日本人独特の語順を形成し、それが認められてきたし、これからも続行するように思われる。しかし、これは同時に聞き手の推理力というこの二つがうまく助け合ってこそ、語順の誤文がエラーの俎上に載りにくくしているものと思われる。だが、教育心理学的見地に立てば、実はその真因はそんなに軽いものではない。

第三は発話者には発話の直前から「語順が間違ったら誤解される」という思い込みがあって、第一声を怖がったために初めから何もしゃべらなかつたという理由で、俎上に載るべき誤文さえ出なかつたのである。つまり誤文が生成される寸前に、黙り込んでしまったからこそ、本来生成されるべき誤文さえも発せられなかつたということである。

筆者が2012年度に大学一回生に施した簡単な「英語を使うとき何が一番気になる？」のアンケート調査(n=38)によると、

- A. 発音が気になる。7人
- B. 語順(何から先に喋ったらいいかかわからない)が気になる。18人
- C. 三単現のsや複数形のsのような細かい文法規則が気になる。13人

予想していた通り、発音や個々の文法規則よりも、まず語順を間違えると絶対に通じないと叩き込まれてきたからだろう。こうした心理的抑圧、脅迫による沈黙。この「沈黙文」が表面上0カウントされていただけのことなのである。日本人の英語学習の深淵には、こうした誤文発話をする以前の問題がまだまだ多くあるのではないか。その最たる好例が語順というわけである。現代規範英文法の教育は、他面でもそうであるが、中でも語順教育に対して、学習者たちに実に大きな誤解を与え続けてきた。実はこのことが本論文で扱う重要点なのである。

第2章 語順とは何か

第1節 語順の定義とその歴史

限りなく深く、広いことばの存在。ことばを建物でたとえるなら、縦に伸びる「縦軸」、つまり柱。それに対して、横に限りなく伸びる「横軸」、つまり語順は屋根、ヒサシのようなものだろうか。そしてそこには何万という語彙が、一方では柱として積まれ、他方ヒサシとして横に広がる(Suenobu 2004)。

語順の定義

さて石橋幸太郎(石橋 1973)によると、語順とは

「語(句)が文中で占める位置あるいは順序。語序ともいう。語順は言語の一般的特長である線条性に基づいて語句の間の統語的關係を示すひとつの手段として用いられる。(以下略)」という。

語順の型

本論に入る前に、ここで語順の一般的な説明を加えておこう。石橋によると、語順には五つの型があるという。(1)基本語順：一般的、慣用的な語順。(2)倒置語順：文法的基準を損なわせないで、ある語を特に引き立たせる目的で位置を変えた語順。(3)格調倒置語順：詩行で一部分の強弱の關係が逆転する現象。(4)論理的語順：使い手の思考過程にそった語順(5)心理的語順：使い手の心理状態の動きに基づく語順。

これに筆者は「外国語を学習する際に生じる(6)開かれた語順(*Open Word Order*)：つまり外国語学習者の母語が影響を及ぼす語順：例 ニホン英語の語順、を加えたい。では上記のような語順は、どのようにして生まれたのだろうか。

語順の生成

一般に「人類の今日の言語は、全体として、1万年前のそれと本質的には異なったものとは言えない(Comrie, 1981 p10)」といわれるが、1万年も前から今に至っても多分変わらないだろうと思えるような想像のもとに分類をしているエスペルセン(Jespersen, O. 1982)を参考にしながら考えてみよう。

語順の生成はまず第一に、使い手の頭に最初に浮かんだ語、主張したいことが最初にくる。たとえば、自分が先にくると主語が「私」になり、「大きな白い家」は、「家よりも、大きくて白い印象」が優先すると考える。第二にバランス、たとえば重い部分は文尾におかれ、強勢とリズムといった音声的美的感覚にも関係する。第三にこのような結果とし

て積み上げられた語順の実績は習慣化し、それらは文法家たちによって確固としたルール化される。たとえばSVO、SOVといった基本語順が形成され、使い手は厳しく規制されることになる。

そして語順はここからが実は個々の言語の問題に入る。同じ民族が同じ言語で対話するという場面であれば、話し手と聞き手の立場、つまり語順は暗黙のうちに理解されるため、問題は少ない。しかしたとえば、NS(ネイティブ・スピーカー)の英語とNNS(ノンネイティブ・スピーカー)の英語の間では、この理解が薄いため、その結果、NSをいらだたせることになり、NSに弱い日本人たちにとっての英語はここから問題が大きくなる。

たとえば、否定文や疑問文では、英語ではnoやnotの意思を少しでも早く聴者に伝えるために語順を早めたり、逆にして疑問形を先に聞いて知らしめるのに対して、日本語では最後まで聞かなければわからないということがある。そうなればちょうど“後出しじゃんけん”のような形勢になるし、またその逆もある。しかし、これこそが各民族独特の文化的要素の発揮点であるが、中でもNSとNNSの間のコミュニケーションでは、そのバランス、不平等さなどが揶揄され、学習の妨げどころか、言語差別を生むきっかけになることもある。

英語語順の歴史

日本語の語順は比較的自由であるのに対して、英語の語順は非常に厳重に規範化されているのはなぜか。それを知るためには、英語の語順がどのような歴史をたどって今の語順に落ち着いたのかを調べる必要がある。

英語の元であるといわれるインド・ヨーロッパ祖語も、日本語と同じSOVの語順であったため、古英語も当時は比較的自由語順であった。つまり単語にはそれぞれ屈折語尾(ことばの道順を示すために単語につけられた「私は」「私の」「私に」といった指標、住所)があったので、屈折によって文の構成順序が適切になされてきた。ところが12世紀ごろからその屈折語尾が消失し始め、中世英語(ME)ではほぼ消失した。

その原因となったのは、ノルマン人がアングロ・サクソンを征服し、ノルマン人たちがかれらと英語を話すとき、形容詞、名詞の複雑な語尾屈折を無視し、語幹のみを用いて自由に話しているうちに屈折語尾が消失していったという説と、単なる輪廻としての言語的自然現象だという説がある。しかし、仲間のドイツ語の複雑な屈折は今も残っていることから、後者は正当な判断とは考えられない。

そして15世紀の半ばには英語はSVOの語順が広まり、語順の確立・固定化がなされていった。中英語では、ほぼ現代英語にみられる語順と同じで主節、従属節もSVOの語順が確定、疑問文はVSOの語順が確定した。つまり、屈折によらず、語順だけで文法的意

味を伝達できるようになったのである。

こうして現代英語の語順には屈折がほとんどなくなったので、統語的にはいよいよ語順が重要な機能を果たすといわれる。しかし言語の意味上の誤解を避けるため、統語上の対策が必要となり、その解決策の一つとして前置詞の多用が見られるようになった。意味の丁寧化現象である。

第3章 文法学者たちの見解

第1節 現代英語の成立と語順の位置づけ

イギリスでは18世紀に入ると、文法学者たちの間で標準英語の確立を目指し、英文法に関する次の三つの理想像が掲げられた。まず、英語文法の欠点を除去し、改善して、英語を一定のルールにはめること。そしてついにはそれを「永久に固定化」すること、なかでも語順を厳密にし、その確立を重要視することであった。それは文法と同時に文法家の権威を確立することであり、それを永遠に保つことを目的とし、それが延々と現在に続いている。そして語順に対する大方の見方は、言語にはまず規則が必要で、中でも膨大な語彙を擁する単語と単語を結び付けるためのルールを、話し手と聞き手どうしが同意していなければ、話のやり取りは支離滅裂になってしまうという大前提に立つ。

このようにたとえば、構造言語学ではBloomfield 学派の場合、語順を言語構造の最も重要な要素の一つとして捉えてきたし、生成文法では語順を基本語順とそれ以外の語順に分類し、前者は句構造規則によって深層構造の枠内での現象、後者はかきませ規則から派生する表層構造の現象であると規定する。

ちなみにここに日本の中学・高校生が日常手にする英語参考書を2～3取り上げて見よう。西垣内の『英語の語順と文法』(西垣内2000 p.13)では、書名が示すように当然ながら「1.語順は意味を伝える基本」と題して「ここでしっかり把握しなければならないのは、英語で内容を伝えるためには、語順が大変重要だということです。」と語順の大切さを説く。また、石黒の英文法参考書『総合英語Forest (フォレスト) 4th Edition』(石黒2005 p.14)では、第一章「英語の文」のPart 1でいきなり「これが基本」「英語の語順」「英語の文は語順に気を使う」という見出しに続いて「英語の場合、日本語と違って、語順はかなり固定されている。…原則としては〈主語+動詞+その他の要素〉He bought a computer.これ以外は特殊な事情がない限り許されない。」と書かれている。

では実際の発話認知と産出のプロセスはどうであろうか。一般的に人は音声言語としてのメッセージをまず、耳で(1)聞き取り、つぎに脳の言語中枢で(2)文の構成要素を分解し、(3)選択し、ついには(4)全体の意味を読み解くのではないかと考えられてきた。しかし、前述の「アッ、傘が降ってきた。雨持っていてよかった。」のような主語と目的語が入れ替わ

るような致命的な語順の文でさえ、誰でも即座に正しく理解するのはなぜか。この疑問に応えるものとして、すでに古くからエイチソン(Aitchson, J.M.1978)たちによって明らかにされてきたように、人は文の構成要素を分解し選択したうえで意味を解くのではなく、最初からメッセージの大意を把握する方法、つまり知覚方略を持っているために、聞き手はその方略を一挙に用いて認知するのではないかというところに行きついた。

人はことばを使うとき、案外大まかな理解をしているものである。この理論は今も覆されることがない。たとえばコムリー(Comrie, 1981)も指摘しているように、OJ(*Open Japanese*「ニホン英語」): John knows more people than I.のIは「ジョンは私を知っているだけでなくもっと多くの人々を知っている」ならmeに変えなければならないが、John knows more people than me.のmeは「ジョンは私が人々を知っている以上にさらに多くの人々を知っている」ならIに変えなければならない、という厳格な決まりが英語にはある。しかし、日本ではこれこそ入試問題の花形であるというのに、英語のNSであるコムリーは「(このような)二つの文を、話す場合も聞く場合も、一貫して区別する英語の母語話者は、おそらくほとんどいないであろう。」という。

語順とか屈折という単位というより、文全体、パラグラフ全体を聞いているのだから、それが規範文法より少々、あるいは先ほどの雨と傘の例文のように規範文法から極端にずれていても、脳は即座にその全体の意図が善意に理解できるものである。

このように語順にずれがあっても理解できることがまだ信頼できないというのであれば、実験してみるといい。日本語の語順の通りに英語の単語をならべ、それを英語のNSをはじめ世界のNNSに英語の語順に組みかえさせる作業をさせる。それによってアナロジーの力を見ることが出来る。たとえば「私は昨日病院へ行きました。」はそのまま日本語だと、I, yesterday, the hospital, went to.となる。幾らなんでもこのままではやはり絶対に通じないのだろうか。

英語学の入門書の中には、しばしば文の定義として「形式素(単語に相当する)がでたらめに並んでいるものを文と言えはらずはなく、一定の仕方で並べられてはじめて文といえる…」というような表現に遭遇する。だが、筆者は今まで世界中の学生たちの多くの誤文に接してきたが、一文として「でたらめに並んでいるもの」を見たことがない。たとえ稚拙に見えても、誰もが相手に伝わるようにという一心の思いで発話し、書きとめている。単語どうし全く関係のないものが並んでいるわけがない。かならず類を持って集まっている。人が作る文は、それがたとえ精神的な病者であろうと、どれ一つでたらめな文はない。でたらめな文は、人がねつ造しない限り生まれることはない。

さて、話を戻すが、通じないというのであれば逆に、英語の語順で日本語あるいは英語の単語をならべ、日本人学生にそれらの語順を組み替えて正文に戻す作業をさせてみる…。

しかしそんなことを今さらわざわざしなくとも、すでに実験例が山ほどある。その極端なずれをわざわざ造って学習者たちに出題してきたのが、日本の英語教師たちが人工的に毎回試験に出題する超難解で膨大な「語順並べ替え問題」、「語順訂正問題」である。全国の学校で今までたぶん何百万回と行われてきた問題である。絶対に通じないと言いながら、国を挙げてやってきたのである。これだけの問題を出題しておきながら、一方では「語順がずれると絶対に理解できない」はずの問題を出題して採点するというのは、大いに矛盾しているとは言えないか。

文法研究が精密になればなるほど、それをそっくり取り入れようとする言語教育の世界では、正比例してこうして厳密な区別を学習者側に要求してくる。英語教育は一体、学習者たちのために何が本当に一番大事なのか、それをじっくりと見直す時間が今一度必要ではないだろうか。次章ではそのことについて考える。

第4章 日・英語の語順

言語の語順は、語族や個別言語によってある程度一定しているといわれる。だが、エイチソン(Aitchson 1999 p.276)によると、ほとんどすべての言語には、つぎのような絶対的普遍性があるという。

すなわち、すべての言語は、①子音・母音を持ち、②それぞれがつながりを持ち、③人や物を表す名詞を持ち、④行為を表わす動詞を持ち、⑤それぞれの単語がつながり、⑥誰が、何を、誰にしたかを表現でき、⑦文を否定でき、⑧疑問文を造ることができ、⑨構造依存的で、⑩機能性を持つ。

このような語順に対する見解のもとに、同一の内容を表現するにあたって日本語と英語の語順がどのように構成されており、それが聞き手であるNSをはじめNNSの人々にどのような影響を及ぼすかを探りたい。ここではエイチソンの③～⑩を中心に、日・英語の語順の共通点と相違点を検討する。

第1節 語順の共通点

文の先頭に主語

まず、角田の第9章の「語順」の項を言語教育的見地からまとめると、

- (1)日本語と同じような語順を持つ言語は東北アジア、コーカサス、パキスタン、インド、中国、南米、中米、北米など世界各地に多数ある。130言語のうちSOV(57言語で44%)が一番多い。次いでSVO(51言語で39%)である。語順は、日本語ではSOVが普通である。
- (2)130の言語を調べた結果、世界の言語の中でSOVが普通である言語が一番多い。母音と

語順という、言語の構造のもっとも中心的な面で、130という言語を調べた結果、日本語は世界で最も普通の母音・語順をもった言語なのである。

ここで重要な共通点は、日・英語のみならず世界中の言語のほとんどが、原則として主語が文の先頭に来ることである。さらにエイチソン (Aitchson 1999 p179) の③～⑤によると、主語は生物、中でも人間が最も多いという。言語を使うのが人間だから当然のことだが、その後には動詞が続いても目的語が続いても問題はない。

ところが、英文法学者たちの多くは英語の語順、中でも主語の位置がさも特殊なものであることを強調する。彼らの言い分は、英語は千年にわたる歴史の流れの中で、語順に代わる屈折語尾の大部分を振り落としたために、その反動として語順自体にしわ寄せがきているから、英語の構文の理解には現代に至るまで困難が付きまわっているという。だからその分、特に語順が重要だから注意するべきであるという。そして語順の重要さをさらに強調するために、英文法学者はこぞって次のような文例を引き合いに出す。

たとえば安井稔は、

「(英語が)複雑な文法(を持っている)というのは、簡単な語形変化に対する代償であるといってもよい。そういう英語の文法の中核をなしているのは何であるかという、それは固定した語順であると考えることができる。

たとえば、(1)The hunter killed the bear.(その漁師はその熊を殺した)と

(2)The bear killed the hunter.(その熊はその漁師を殺した)

とを比べると、用いられている単語はまったく同じであるのに、(1)と(2)とでは、殺されたものがまったく異なる。その原因は単語の配列順にある。」という。

語順の線条性と屈折語尾の重要さを述べたい気持ちはわかるが、ここまで読むと読者のほとんどが、英語の語順というのはさぞかし厄介で、大変に重要なものではないかと思ってしまう。繰り返すが、少なくとも日本語も英語も基本語順は主語が文のはじめに来るという点で同じ語順の言語である。だから当然、日本文においても同様に(1)と(2)では殺されたものが異なる。だから日・英語とも主語が殺すものは同一であって、同時に殺されたものも異なるはずがない。二文とも「主語」が「目的語」を殺すことにおいて同一である。だからここでは一般的に日本語と同じ語順だと説明してやれば、それだけで済むことなのだ。いや、同じなのだからその必要さえない。

このようなことを、ことさらこんなに念を押して知らされなくても、日本人は英語と同じように基本語順では主語を語順の先頭に出すのは当然である。ただ、これによる誤解、誤文は、時たまOJの母語化：I fish like (→like fish).が見られる程度で、しかもこのように動詞と目的語の語順が入れ替わっても、意味は通じる。それ以外のFish like Iのような文は、人がねつ造する以外には、自然言語界ではまず見られない。

ここで筆者が言語教育学的見地から問題にしたいのは、日本語でも英語でも基本的にはほぼ類似したこうした語順を、日本人にとってごく当たり前の語順を、ことさらに英語の語順が特別なことであるかのようにこうして引き合いに出し、これほどに英語の語順の重要性を強調する理由がどれほどあるのか、教育的立場からの素朴な疑問である。むしろこれによって逆に初級の学習者や読者は全般的に、なんとなく英語の語順はこれほどに複雑で日本語と大きく違っているのだと思い込ませてしまったのではないだろうか。ちなみに主語が語順の先頭に来ないような言語は、松本克己(松本2007 p64)によれば、ポリネシア語のようなVSO型が10%余りあるのみで、世界中でほとんどないといわれる。

自動詞文

日本語では、「次郎が 歩く。」S+V.

英語でもJiro walks. SVであり、副詞句が付随する場合も、「次郎は 歩いて 部屋に入る。」Jiro walks into the room. 副詞句の位置は日英語ともに自由である。

母語踏襲化(以下母語化と略す)：ウェールズ英語では、語順は母語であるウェールズ語の語順を踏襲する傾向が見られる。Coming home tomorrow he is. (→He is coming home tomorrow.) のように。

簡素化：OJ“(+Do you) Teach?” “No (+I don’t) teach.” このように人は元来、自分の言語・文化に照らし合わせて不要と思う語彙は積極的に省略して自動詞化するのが自然。さらにOJ:We enjoyed (+ourselves) very much at the party.や I will challenge (+myself to climb) Mt. Fuji. 現実では他動詞の自動詞化、たとえば、OAでは正解でありながらOJでは今も入試で受験者を陥れるための目玉商品だ。

入れ替え化：OA(*Open Asian* 「アジア英語」): Henry bicycled home.

Be 動詞と「です」

Be動詞はその形がbe, is, am, are, was, were, been, beingなど複雑でその厳密な意味は多岐にわたるが、日本語ではほぼ「です」「だ」にあたる。その点では両者は類似点であり、どちらも単なる符牒であって、なくても通じることが多い。だから、初学者が「花は美しい」を→Flower beautiful.と書いても世界中誰にでもわかる。しかし現実にはほとんどの教師が5点満点を0点にする。大切なことは、まず「ここまで良く書けたね」と励ますのが人間教師ではないだろうか。

英語国民も幼年時はbe をつけない。親はこんな些細なことには放っているからだ。学習者も母語話者の子どもたちがそうであるように、それを自分で発見するから省略する。普段ならこのように、それでスムーズに行くのだが、ことさらに「beとは何か」などと

謎めいた質問をする先生が多いのだ。答えは「beとは存在を表す」のだという。まさに哲学の授業だ。大事なことは、むしろ意味的にはそんなに重要ではないということを学習者に知らせることである。つまり重要なことは、こうした符牒記号を無視させることである。第一自然な学習の中では、人は自然とこんなものを無視しながらことばを学習しているのである。本論文シリーズの形態編(末延2012, キーワード:ニホン英語、形態)でもすでに論じたが、同じことが冠詞、複数形等に言える。

日本では逆に時間がないからと、このような余裕の時期を与えず、初めからこのbeがないと0点となる最重要項目となっている。こうした表現は規範文法学者からすると文法の破壊者のように聞こえるだろうが、言語教育的に語順をみると、これを学習の途上で縛ることは、牛を矯めて牛を殺すことになる。まさに学習者を縛ることになる。この影響で、これの厳しいチェックによって、学習者たちに途方もなく大量の「沈黙文」を生み出させてきた。こうした文法学と在来の英語教育の軽薄な迎合は、これだけでもとてつもない大きな精神的打撃を学習者たちに与え続けてきたし、今もそうなのである。

省略化: OA,OJ: I (+am a) Japanese. You (+are an) American?

OA,OJ: I (+play) tennis. (Do) You (+play) tennis? He (+plays) tennis. I bicycled.これらは名詞の動詞化といってもいいだろう。この現象が現在世界中で進んでいることを嘆く教師が多いが、アジア英語ではすでに定着している。

丁寧化: OA,OJ:I am play baseball. Are you play golf?

OJ: You like? I eat. のような自動詞化。You swim? I walkからの連想から始まって、このように他動詞を自動詞化して平気である。何と大らかではないか? アジア英語ではこんな英語が堂々と飛び交っている。さらに、黒人英語を観察すると、be, been の使い方がいかに効率的かが分かる。

我が国の初級英語の試験問題を見ていると、英語の先生はどうしてこんなに生徒を苦しめて喜んでいるのだろうかと思えるような、意地悪な引っ掛け問題を好んで出題する。これも大事なのだろうか、まるで国語を試しているみたいだ。たとえば、中学2年の

「彼ってとってもカッコイイと思わない?」を英訳する問題。

() () cool?

U君は(He) (very) cool? と書いて大きなバツ印をもらった。

正解は(Isn't) (he) cool? だという。

名詞 + 名詞

複数の名詞を並列する時、多少の優先順位もあろうが、ほとんどすべての言語で、pens, pencils and rulers = pencils, rulers and pens,のようにどれが先に来てもいい。これ

は「語順の三種類(対比、習慣、等価)」の一つ「等価語順」とよばれる。ところがOJ・OAのwhite and black(→black and white)～. に対しては指南役者のレッドベター.M(レッドベター2007)はこれを誤文としているが、自己文化中心主義の骨頂例であろう。

OA,OJでは: I and my friend(→My friend and I) went to the zoo.もある。英国エリザベス女王は来日時、最初の挨拶では必ずI and my husbandとIを先頭に出すだろうという文法学者たちの期待に反して、晩餐会ではフィリップ殿下の隣でさらっとMy husband and I といったものだ。ちなみに数詞と名詞の場合の語順も、数詞は日・英語のどちらも名詞の前に来る。例: 5冊の本、five booksなど。

形容詞+名詞

形容詞は名詞の前に来る。例: 大きい家。a large dog. 英語の例外として名詞の後に来るものは、something tasty, the people present, things Japanese. これらはフランス語の順序をならったものではないか。さらに、最初の名詞が形容詞的に使われると、語順をいれかえることによって意味が違ってくるが、それも日・英語も同様に違って来る。これは「対立的な語順」にあたるが、race horseは「競走馬」、horse raceは「馬の競争」のように、語順はともに日英同じだから理論上混乱はない。

しかしこれを、母語の場合でもよくあることだが、たとえば、拡大解釈化: OJのI ate my lunch box (→box lunch) in the park.のように、Lunch boxは弁当をいれる箱、box lunch は箱に入ったランチ、つまり弁当の中身を表すが、指南役者のレッドベター.Mは、これを取り違えるとすれば「(弁当箱を)食べると歯もおなかも痛める(レッドベター2007 p16)」から誤文だという。だから母語であっても当然あわてて同じ間違いをするが、笑って済ませる。たとえ語順が違ったとしても、常識で考えてもこんな誤解はありえない。フランス英語もタイ英語の語順も、名詞と形容詞が頻繁に逆になっても、たいていは今や世界中の誰もが理解できる。だからわざわざNSたちがまるで鬼の首を取ったように誤文だとはやし立てるほどのものではない。これではNSと鍋も申もたべられない。こうして彼らは世間を拓げるためのことばを使ってわざわざ自ら世間を狭くする。

所有格+名詞

所有格は近代英語までは 's が一般的だったが、しだいにofが台頭してきた。日本語では後置詞の「の」で示し、所有物を示す名詞の前に来る。例: ブラウンさんの家。英語では二つの方法があり例: Brown's houseが頻度が高く、英語の歴史的な発達を通じて頻度を高めてきたという。もう一つはof を用いて所有を示す名詞の後に来る。例: the house of Brown OJでは圧倒的に前者を使うのは、語順が同じだからである。

固有名詞 + 普通名詞

日本語の固有名詞は一般に普通名詞の前に来る。

例：王子動物園、佐藤教授。ホテルオークラのような逆もある。人名では姓名の順。

英語も一般に普通名詞の前、または後に来る。Hilton Hotel, William Street, Professor Smith, Uncle Tom, 人名では名姓の順。これらは完全に共通しているとは言えないが、お互いが倒置していると見ると、お相子である。

副詞 + 形容詞

日本語では、形容詞を修飾する副詞は、形容詞の前に来る。例：とても大きい。

これは英語でも同様である。例：very small, quite easy, too late ただし次のような例外もある。good enough また、平叙文で、語順倒置をして副詞を引き立たせる。例：Down she came. Hardly had I~.

母語踏襲化(以下母語化と略す)：OJ・OC(*Open Chinese*「中国英語」)：John sang enthusiastically the song (→the song enthusiastically). たとえば日本人が英語圏の町を歩いていて“Would you tell me how to go to the bookstore?”とたずねたら、英米英語なら“Turn left at the 5th corner~”と説明する。学習者はここで間違ふ。英語の語順だと真っ先に左に曲がって5つ目。ところがOJでは、母語の語順に沿って動きの順序に合わせて自然と副詞句を先頭に出して、“At the 5th corner, turn left...(五つ目の角を左に)”と指示すればいい。

次にセイン(セイン.D 2005)が最も「ヘンな英語」だとするOJの「避難所はT大学」Safety Evacuation Area is T. University.の語順は間違いで、「T大学が避難所」→T. University is the Safety Evacuation Area.が唯一か。緊急時、人々が真っ先に目に留めたのは避難所かそれともT大学か。自明である。しかもこの際に至っては、冠詞のみならずT. Universityの前に前置詞atをつけるとしても邪魔だ。このようにOJの精神は、相手の身になって説明する。これこそがOJ(ニホン英語)の特徴のひとつで、この工夫が自然と随所にみられるから、世界から一目も二目も信頼を置かれる。

従属節と主節

節は主節と従属節に分かれ、日本語では大まかに言って従属節は主節に先行する。しかし、従属節が主節の後に来ると、付け足しの感じになるのが線条化の宿命だが、そのために意味がそんなに変わるわけではない。

花子はうれしい、もし明日次郎が来れば。

英語でも両方可能である。

例：If Jiro comes tomorrow, Hanako will be happy.

Hanako will be happy, if Jiro comes tomorrow. (この語順の場合、条件節が強調される。)

つぎにOJ: Were this not so, のような文は18世紀を頂点として次第に下降、現在では、日本で出題される大学入試問題以外では、世界中でほとんど用いられない。繰り返すが、一番重要なことは日・英語とも原則として主語が一番に来ることである。また、場合によってはNNS同士の話者は倒置のつもりでないのに、NSには倒置に取られるというニュアンスの違いは否めないが、それによって互いが大きな誤解を生むという事実は見られない。

以上見てきたように、日・英語の間には、これほどにたくさんの同一点が存在するのである。それを、初めからことさらに日英語の相違点を示して練習させるのではなく、丹念に多くの例文を示しながら同一点、類似点を中心に文型練習をしてやれば、特に初学者も語順の混乱もなく溶け込みやすいし、教授者側もスムーズに導入できる。

第2節 語順の相違点

では次に私たちの母語である日本語と、私たちが学習目標とする英語の語順の相違点について言及する。まず他動詞文を見てみよう。

他動詞文

日本語では主にSOVの語順に対して、英語は主にSVOの語順を用いる。

例：正男が花子を見た。(SOV)

英語：Masao saw Hanako. (SVO)

エイチソン (Aichson 1996 p.184) によると世界中の402言語のうち基本語順としてSVO, SOV, VSO…など六つの分類が可能であるが、実際はSOVとSVOがその90%近くを占めるという(Comrie,1981 p.36)。

ここで日・英語の語順について、繰り返すが、一番重要な同一点は両語とも原則として主語が先頭に来ることである。その後には動詞が先に来て、目的語が先に来て問題ではない。それは聞き手の推理によってほぼわかる。それにS+O, S+Vの同じ2語なら、S+Oだけで、つまり、OJ: I tennis. でたいていはテニスをするのがわかる。それも動詞playがなくてもわかるのだ。それにtennisの後はplay watch 以外は常識的に想定できない。一方S+VでI playだけでは何をするのか全くわからない。Playの後は何千通りもある。以下、多くのOJが見られる。

OJ: I (+go to) school. I (+want some) coffee. I (+want) this., etc. Do you (+ride a) bicycle?

言語の世界では、言語に差別はない。だから良い文法、悪い文法というのではない。しかし言語によっては効率、非効率なコミュニケーションをする言語はある。ある条件の中ではSVだけで、Oがなくても、推理によって理解できるという面を持つ便利な語順という観点に立てば、SOVはSVOよりかなり効率的である。

実は世界のほとんどの言語が元来自然界からこの効率的なSOVを踏襲していて、英語も古英語時代にはSOVの類型に入っていた。ところがそれが後には数々の変遷、中でもともすれば不自然な何らかの事情、多分に人為的な強制が入ったものと思われるが、そのような経過ののち、現在のような非効率的なSVO言語に“退化”したという解釈ができないだろうか。そうであれば、英語のSVOの語順は日本人が“洗練された語順”として憧れるほどの代物ではなさそうだ。

また、世界の言語の語順について、松本(松本2007)によると「日本語と同じSOV型が世界のおよそ50%、次いで英語や中国語のようなSVO型が約35%、ポリネシア語のようなVSO型が10%余りという数字になっている」という。

コムリー(Comrie,1981 p.93)はNSの立場から「二人の参加者がある時は、通常、行為者が被行為者よりも前に来る。被行為者とは行為の対象となる物や人である」という。つまりTom hit Jerry.もTom Jerry hit.も世界中の言語でトムがジェリーを打ったと理解されると思うと述べている。このように主語は基本語順として先頭に立つのがほぼ世界水準で、まるで機関車のように力強く述部をけん引する。

さらに日本語では基本語順として動詞が文末に来ることが重要なルールで、それさえすれば主語と目的語が入れ替わっても差し支えない。でも「求め。運転手。(VO)」のように動詞が文頭等に来ることもある。英語でも目的語が主語の前に来ることがある。例：That play, John saw.「あの観劇を、ジョンは見た。」(OSV)。こうした点では日本語も同じだからことさら相違点でもない。

日本語と同じ語順でJohn, that play, saw.はどうだろうか。日本語の語順を知っている聞き手ならわかる。続いてThe lion helped the mouse.「ライオンが助けた、ネズミを。」The lion the mouse helped.「ライオンがネズミを助けた。」

さらに直接目的語+間接目的語の場合でもThe lion gave the mouse a chance.「ライオンが与えたのはネズミにチャンス。」、The lion gave a chance to the mouse.「ライオンが与えたのはチャンスである、ネズミに。」、The lion a chance gave the mouse.「ライオンがチャンスを与えた。ネズミに。」、The lion the mouse a chance gave.「ライオンがネズミにチャンスを与えた。」etc. つまり、推理力の力さえあれば、語順の違いによる日・英語の誤解はほとんどないことがわかる。

側置詞と名詞

側置詞(adposition)は日本語では名詞の後に来る後置詞、英語では名詞の前に来る前置詞がある。日本語にも「至神戸」のように前置詞があり、逆に英語にもall the world over(世界中に=all over the world)のような後置詞があるが通じる。

関係節と名詞

関係節は日本語では名詞の前に来る。

例：(昨日、犬を殺した)男は、家にいる。

が、英語では名詞の後に来る。

例：The man (who killed the dog) is in the house.

OJでは重文として:The man killed the dog and he is in the house.

日本人は「私が買った本」というがthe book I boughtだと英語では後置修飾になり、日本人にとってこの順序は非常に困難をきたすため、I bought this book yesterday, and this is the book.とする。初学者には徹底した文型練習を施すかあるいはそれができないのであれば、初級者は複文ではなく、重文として指導してゆくのがいい。まかり間違っても文法的な説明で終わることのないようにしてほしい。

こうした後置修飾をコムリー(Comrie, 1981 p.160)は、このタイプをヨーロッパの諸言語では非常に多く見られるけれども、世界諸言語全体を通じてみると特に多いタイプというわけではないという。後置修飾はこのように日本人のもっとも不得意な語順であろう。でもこれも文型練習で慣れればいいことではある。

OJ: My like book (→The book I like)～.

比較

日本語では

武生は 俊 より 背が高い。

英語例Takeo is taller than Toshi.

角田(角田2009)によると他の言語の中には比較の構文を持たず、別の形容詞で「武生は背が高い。俊は背が低い」と表現したり、あるいは否定文を使って「武生は背が高い。俊は背が高くない。」という言い方が易しいので幼少時によく使用されるという。また、日本語では「勝る・しのぐ」という類の動詞を使って「武生は背の高さで俊に勝る。」ということもできる。

英語では文尾のThan Toshiがtallerに後置修飾されるため、日本人にとっては語順の誤解がよく見られ、主語と目的語が入れ替わってまったく主述が逆の文を作ったり、逆に

解釈することがある。そのため、初学者には初期の段階でfrom Kobe などのようにthan Toshiをチャンクとして定着させるために日本語の語順を優先してThan Toshi, he's taller. という語順で導入する手もあるだろう。日本語ではthanはtallerよりもToshiに引き付けられやすいのではないか。Than以下が後置修飾となり日本人には不得意な語順である。

動詞と本動詞

角田(角田 2009)によると、助動詞と本動詞について、英語のように助動詞が本動詞に先行する言語たとえばmust(助動詞) + go(本動詞)は49言語(38%)、逆に日本語のように本動詞が助動詞に先行する言語たとえば「愛して」(本動詞) + 「いる」(助動詞)は40言語(31%)であるという。この点では日・英語ともごく普通の言語である。日本語では本動詞が先行する。例：食べて いる(助動詞とみなす)。こんな時には語を分解せず、チャンクとしてとらえて学習させるのがいい。

英語では一般疑問文を作る時、主語と動詞(場合によっては助動詞)を倒置する。This is a book.をIs this a book? のように倒置させなくても文尾のイントネーションを上昇させてThis is a book? (↗) のように簡単に作るができる。世界の言語のほとんどすべてにおいて、平叙文のイントネーションを変えるだけで、一般疑問文(Yes/Noの疑問文)を作ることができるといわれるが、ニホン英語は簡素化のためにも、基本的にはこれに徹するという道がある。

一般動詞の疑問文の基本語順では、次のような文法規則に従わなければならない。つまりThey study French. を疑問文にするには→Do they study French?

ここで問題となるのが助動詞のdoである。Doにはthereや仮主語のit のようにそれ自身意味がなく、文法のための単なる「運び屋」に過ぎない。ましてやそれが大手を振って煩雑にかつ頻繁に使われ、5つの使い方があり、それらは1. 一般疑問文、2. Wh疑問文、3. 否定文、4. 強調、5. ある種の副詞が文頭に来たとき、である。さらに否定文で、be動詞も助動詞もない場合は、「運び屋」の助動詞doを加えて、その直後にnotを置くというウルトラ級の変換が必要となる。

このような形でdoを使う言語は130言語のうちでわずか6言語で、世界的に珍しく、中でも英語は最も複雑である(角田 2009)という。こんな複雑な文法操作を日本の学習者たちは文法規則として叩き込まれる。学習の初期に文型練習をするでもなく、疑問文の時と同じく、理屈として覚えるべき文法事項として叩き込まれるのである。ところが、文頭を助動詞かbe動詞のいずれから始めるかで躊躇し、その選択肢はAre you?, Do you?, Does he?, Are they?, Does it? をはじめ組み合わせによって正確な並べ方だけでも数十種類に及ぶ。そしてついにはこれらの無意味な語句の選択に迷った挙句、次に続くべき大切な伝達

事項を犠牲にしつつ、沈黙してしまう。

これを克服するには、チャンクで徹底した文型練習をさせるか、あるいは、ニホン英語では、最も手っ取り早いのが平叙文のまま文尾のイントネーションを上昇させることである。これによって世界に通じる。ただ、どんなことがあっても初心者に上記のような複雑な文法用語を使ってdoの用法を得々と説くことだけは避けてほしい。アジア英語やニホン英語では、こうしたdoをしばしば不要なものとし、簡素化し、理解率も完璧である。

副詞と動詞

日本語では副詞は動詞よりも前に来ることが多く、後に来ると付け加えに聞こえるが大して意味は変わらない。

例：武生は いつも 早く 歩きます。

英語では副詞の位置はあまり厳密ではない。動詞の前後に来る。

例：He always walks fast. Today Takeo is reading., Takeo is reading today. つまり日・英語は同じ。

OJ: He always fast walk (→walks fast).

不定詞の副詞的用法では、OJ:I drink coffee to go to café (→go to café to drink coffee). のような非論理性が見られるが、常識的に逆算して理解できるというのが人間の理解力だ。

疑問文

日本語は通常疑問の印「か」を文末につける。

例：武生は本を読みました。→武生は本を読みましたか。

英語では通常主語と動詞の倒置が普通だが、(1)動詞がbe動詞であれば、そのまま主語と倒置させる。(2)動詞と本動詞のときは、主語と助動詞を倒置させる。混乱極まるのは文に(3)be 動詞も助動詞もない場合、「運び屋」の助動詞doを加えて主語と倒置する。(4)さらに文が過去形の場合、doを即時過去のdidに変え、(5)動詞を即刻現在形に戻さなくてはならない。しかも発話時にはこれを0.2～5秒のうちに処理しなければ、NSの機嫌を損なうというのだ。

OJ:(+Do) They study very hard? No, they no (→don't) study hard. この点では日・英語ともごく普通である。こうした疑問文に代わるものとして語尾の抑揚と付加疑問があるが、これがまた相当の難解な代物であるので、その解説は「統語編」に譲りたい。

Wh-疑問文

日本語では一般に平叙文の場合と同じ位置に来て、文尾に「か」をつける。例 (1)昨日、

どこへいったの? (2)どこへ昨日、行ったの?(3)どこへ行ったの、昨日? では(2)(3)は尋問的。英語では一般に文頭に来る。例: Who saw a movie yesterday? When did John see a movie?

母語踏襲化(以下母語化と略す): OJでは、Where (+are you) going? (どこ行き?) I wish I had money a little more (→ a little more money).(遠慮がちに「お金をもう少し」)。OJ・OCでは、

(When he will(→will he) be going?

This evening at seven(→At seven this evening),

You last summer visited where(→Where did you visit last summer)?

OJ: Who Bill see? 「誰がビルを見たの?」 What for 「何で?」は一般にWhat are you ~ ing for?の省略であり、後置詞とみることもできる。ほかにOJ: Where from? 「どこから?」 Who with? 「誰と一緒に?」も。

OCではGoing where? タイ語・インドネシア語はSVOの語順をとり、中でもタイ英語には第三冊目か三冊かがはっきりしないbook threeがあるが、文脈で判断する賢明さがある。スリランカ英語では母語タミル語、シンハラ語の語順の影響でbeer bottle (→bottle of beer), What Tom did this morning?, Six o'clock, I'll get up.などがある。

Wh-疑問文での倒置

Who are you? Where did you go? などのように英語では疑問詞の後、倒置が行われる。

また間接疑問文は、英語ではある疑問文が別の文中の一部としてはたらき、その時英米英語では語順が逆になるという規則がある。しかしアジア英語(OA)、OJ: Do you know where is the key of this room (→ the key of this room is) は、中でも中国英語ではほとんどこの規則は関与しない。なぜなら意味的にも他の文法間の規則との兼ね合いにおいてもまったく問題ないからである。ところが日本ではこの英米文法の規則を厳守することこそが最重要規則なのである。またOC・OAのWhy you were (→were you) absent last Friday? は文頭にあるであろうI'd like to knowの省略と善意に解釈される。

否定文

日本語では、動詞の否定は「食べない。」「食べません。」のように「な(い)」「せん」等の接尾辞で示す。英語では動詞がbeであればnotはbe動詞の直後に来る。例: I am not a teacher.

助動詞と本動詞があれば、notは助動詞の直後に来る。例: I do not swim.

Be動詞も助動詞もないときは、助動詞doを加え、その直後にnotを置く。

例：I do not speak American English.

否定文でこのように単なる“運び屋”としてのdoを使うような言語は、130言語のうちでわずか6言語であって、中でも英語は最も複雑であるという。こんな複雑なものを日本の学習者たちは“文法規則”として学習の初期に句型練習で固めるでもなく、疑問文の時と同じく、理屈として覚えるべき文法事項として叩き込まれてきたのである。

母語踏襲化(以下母語化と略す)：ネパール英語はネパール語の影響により、I will eat not (→not eat) lunch.、さらにバングラデシュ英語にはHow you had (→have you) come to know～?があるが彼らと1時間も話せばすぐ判りあえるのがすごい。

OJでは：Is he go to～? Does you come to～? Do he plays～? He isn't go to～. のようにとどめなく多くの文例が見られる。そしてそれらはすべて理解できる範囲の中にある。

主節と従属節

日本語では従属節は、主節に先行する。

例：「私は6時に起きれるように、目覚まし時計をセットした。」

英語では、基本語順では従属節はほとんど主節の後につく。

例： I set my alarm clock so that I could get up at six.

しかし逆に日本語の順序で、So that I could get up at six, I set my alarm clock.も国際的に十分に理解される。その意味ではこの場合も両語には決定的な相違点はない。

また、Because節では、子どもの母語に現れるのと同様なOJ: I like planes because I want to be a pilot (→want to be a pilot because I like planes). が見られるが、これも理解される。When 節も同様である。OJ: I went to Okinawa time (→When I went to Okinawa),～.

以上が日・英語の語順の同一点と相違であるが、互いの言語が同じ順序になったとしても、そのほとんどが案じていたよりもずっと通じあうことが分かった。しかも「直せる文は誤文ではない」という観点に立てば、少なくとも日常会話の範疇であれば、ほとんどの項目が推理によって理解可能な文になることが分かった。

第5章 語順の推理力

第1節 類を持って集まる

動物の様々な器官の細胞片を、ビーカーに入れて混ぜる。しばらくするとそれぞれ同じ器官の細胞どうしが寄り添ってコロニーを造る。集まった同じ器官の細胞は、それぞれ自

分がその器官のどの位置に属するかをも知っていて、細胞自体に自分の仲間を呼び合うメカニズムがあるのだろう(Suenobu 2006)。

同じように人が単語を基本語順から外れて、バラバラに混ぜてしゃべる。聞く側の人間の脳がうまく選別して整え、理解する。聞き手はそれぞれの単語は文のどの位置に属するかを知っていて、規範文法の順序に整えられるだろう。たとえば、

母語化：OJ: Part time job in place home town the Coop's.は、少なくともパートの仕事をしたこと、そしてその場所がはっきりわかる。

これに類似した実験がすでにヒルガード(Hilgard, E.R, 1988)らによっておこなわれ、証明された。でたらめな語順の文を伝達してゆくうちに、自然と正しい語順に並べ替えられるという実験である。これはどんな言語であっても、人はことばを自分が慣れた語順に、自然に変化させてゆくことを示している。つまり人間のことばには、言語の存在意義が分かっている正常な人間には、たえず「善意の訂正」の機能が働くことを示している。

そのからくりを調べるには「人間になぜことばがあるのか?」を考えるといい。コムリー(Comrie, 1981 p.69)は、言語普遍性の研究において、人間のことばに 3つの区別を立てた。①人類言語にとって何が必要な特性か。

②何が人類言語にとって不可能な特性か。

③何が人類言語にとってたまたま可能であってもかならずしも必要でない特性か。

①については、主語[人間・自分]が先。自然の摂理によって誘導されで上がったことば、ここに自然の意思、つまり人間相互の平和な社会生活のためにという目的が現れるだろう。②は基本的にはないだろう。むしろ無限だろう。③は冠詞、複数のs、be、など、押し付けられた場合、文化の相違によってむしろ学習者を多大な精神的障害に導くものさえある。これこそが現代の言語教育学が整理すべき問題点である。

コムリー(Comrie, 1981 p.23)によると、セルボ・クロアチア語は比較的自由語順なので、接語のない4文字の文、Petar, cita, knjigu, danas. (「ピーターが今日本を読む。」)の単語を24通りどのように並べ替えても、同じ知的意味の文として文法的であるという。

さらに、英文法家たちが正文を養護するために非文の文例としてねつ造する埋め込み文や、The stone saw Mary., Built Jack that house the is this?(Comrie, 1981 p.17) Cat the boy saw the.(Foster-Cohen)などがあるが、このような文は、理解できない文として非文と呼ばれている。誤文研究を専門とする者から見れば、自然界には断じて現れることがないこんな文を、筆者はねつ造誤文と呼んでいるが、これでも私にはわかる。

第2節 語順のコミュニケーション上の公平さ

以上見てきたように、NSどうしの会話では、前もって暗黙の了解のもとで規範文法の

ルールに従って共通の語順が設定されているので、聞き手は次にどんな語が来るかを推定しながら聞き、話し手もそれを相手に期待して話すので、公平なルール上で会話できる。では音韻、文法などすべてを含めて、日本人と英米人が英語を使って会話をするとき、いったいどんなルール上の平等があるだろうか。ほとんどゼロで非民主的である。実はNSどうしの推理力が、「世間語」(*Open Language*)ではNNSとの会話でも、ルールとして平等に、あるいはそれ以上の推理力が要求される。そのルールとはNSとNSSの母語文化独特のルールを互いが容認することである。

そして英語を通じて世界の人々が互いに母語の語順を残すことを許し合い、それらを尊重し合うことである。こうして初めて平等な会話が全うされるのであり、さらにこれによって相手の言語の語順を知らず知らずのうちに理解し、相手の言語をマスターできるというものである。

第6章 結語

規範文法では、文は単語一つ一つの形態素に、文法的な諸関係を標示するための接辞、つまり、格、数、人称、時制などを示す標識が付加され、それに語順といった手段にたよってこそ、はじめてその意味、内容が明らかになると従来考えられてきた。

しかし現実には、たとえ孤立語のように必ずしも標識がなくても、あるいは、語と語との間の文法的関係を示すと言われてきた相対的な配列順、つまり語順に頼らなくても、大概の場合、聞き手と話し手の互いが判り合おうとする推理の努力によって、互いの意思が完全とは言えないまでも、いかに通じるかを示した。人間の推理力もさることながら、言語自体にこうした包容力が内在しているのではないか。そしてこれこそがユニバーサル・ランゲージであり、それを教えることこそが言語教育者の第一の使命である。

主語が文の先頭に

語順の重要さを示すために、よく「主・述が入れ替わると意味が逆になる」などと、脅しの道具に使われてきた。しかしこれは肯定文では実際にはほとんど起こらないことがわかる。そのような語順の言語はほとんど自然界にはないからだ。一番重要なことは、日本語も英語も、基本語順として主語が文の先頭に来ることにブレはない。そのうしろには動詞が来ても目的語が来ても、推理すればNSはもちろん、NSSでも誰でもわかる。I helped Tom. Tom, I helped. I Tom helped. もすべて理解できる。その一方で、多くの文法書では正文の説明を一段と華やかなものにするために、こうした自然界には見られないねつ造された誤文が、“非文”として、あちらこちらにあまねく添えられている。

推理すれば通じる

はじめから直せないような不明文はともかく、学習者の文は推理すれば通じる、つまり「直せば通じる」文がほとんどである。この「直せば通じる」という原則からすると、規範文法における語順は、それほど重要なものではない。本当の意味での語順による不明文は、ごく微量だった。しかもそれらも、たいてい融通性に富んだ聴者の推理力によって、自然と規範文法の順序に是正される。たとえばOJ: Bill (+was) hit by John.はbyがあるからすぐに受身の文だとわかる。

孤立語であろうと、屈折語や膠着語であろうと、実際は人間には語順、中でも母語の語順を正す能力は大きなものがある。そればかりか、すでにある程度学習が進んだ学習者にも、すぐれた英語の語順推理の機能が働くものである。そのための実験などわざわざしなくとも、センター試験や英語検定試験には、必ず語順を正させる問題が出題され、それは全体のほぼ20~25%の得点を占める。NNSであっても、その正解率の70%近くの高さを見れば一目瞭然である。

確かに文ははじめから当該言語の語順に沿って作文することが理想ではあろうが、たとえ初学者が順不同な語順を使って作文したとしても、正しく並べ替える能力がある人、つまり教師やNSたちがそれを直して理解してあげればいい。それを絶対に通じないと、ことさらに誇張して息巻くのは間違っている。教師が語順に対するそのような考え方をその基礎に持っているといわないでは、外国語の基礎教育の在り方が全く違ってくる。いきなり間違いだと学習者を責めるのはいい方法ではない。人間間の実際のコミュニケーションはたいてい“I know what you mean.”の世界なのである。

しかし面白いことに、この推理を一番しようとしなくて、できないのがむしろことばの教師である。それは初めから文法書ルールを優先するために、学習者の誤文を自ら少しでも推理してあげようとさえしないからである。コミュニケーションを円滑にはかるために、話者側の責任もさることながら、聴者側の責任の大きさ、なかでも教師、NSにはほとんどの責任がある。

母語の踏襲

語順が思考の順序である限り、私たちが英語を使う場合、英語の語彙自身には百歩譲っても、その順序はできるだけ譲りたくないものだ。そんな心理が誰にでも働いている。母語の語順は民族の指紋、DNAのようなものだからである。

英語を使うとき、NSもNNSも、互いにこのような語順の違いに順応できるようにありたい。せめて語順に関しては両語とも互いに対等でありたい。そのためにはNSや教授者たちはNNSの語順を推理することが強く望まれる。それぞれの母語文化の語順を理解し、

尊重し合うための努力から平等な世界言語が生まれる。言語の普遍性を目指すなら、まず、互いの母語の個性と多様性を認めなければならない。だから教育現場では、単なる語順の良し悪しを採点基準に入れないようにしてほしい。完全な英語ができなくても、10点満点の場合、語順の正誤はともかく、必要な語彙を並べただけでも5点をさしあげてほしい。そして残りの5点は聞き手、読み手の理解力という配点をしていただきたい。言語教育における採点の基準というのは、どんなときにも、教師の心の中にある「善意の理解」が“規準”となるのである。

日本人に不得意な英語語順

日本人にとって英語の語順のほとんどは、目新しいものではなかった。しかし本論文は日本人にとって逆に不得意な語順をもわずかながら明らかにした。それらは以下の後置修飾と呼ばれる語順であった。

- (1)本動詞と助動詞の語順が逆：He will go. 行く だろう。
- (2)関係代名詞の後置修飾：The book that I bought yesterday 私が昨日買った本
- (3)比較級の後置修飾：She is smaller than Tom. 彼女はトムよりも 小さい。など。
- (4)不定詞の副詞的用法：OJ: I eat dinner to go to the restaurant (→go to the restaurant to eat dinner).
- (5)When 節：OJ: I visited Kyoto time (→When I visited Kyoto),

こうした語順の文は混乱を避けるため初学者には極力避けたいものだが、ニホン英語はこのような日・英語の相違点をいつまでも避けて通ることを推奨するものではない。これらの文型がすんなりと日本人の中に入ってゆくためにはどうすればいいか。それは文法説明でなく、文型練習をやれば日本人も規範文法の語順に従って使うことができるようになる。人はどんな語順も文型練習(末延1968)をすることによって、それに慣れ従える頭脳を持っている。ことばの生成のために人間に与えられた恩物である打ち出の小づちも、振らなければ宝の持ちぐされとなる。

語順より語彙数

今まで語順教育は文法に重点が置かれすぎてきた。では今後どうすればいいか。現今の小中学生のカタカナ英語の獲得数は3,000とも4,000ともいわれている。本論文のはじめにも記したように、語順以上に大事なものは、学習者の所有する語彙数である。かれらはすでに幼少年の段階でカタカナ英語を学校以外でテレビ、ラジオ等の影響で、ナビゲーター、コンビニなど難しい単語をやすやすと自然に親しみ学んでいる。文科省の中学3年間の基本単語は1,000にも満たないというのに、かれらのその数はその数倍、しかもその多くが生活用語だ。

だから日本人の手っ取り早い英語は、これらを語順に左右されず、主語をはっきりとしたうえで、知っている限りのカタカナ英語で重要語彙から順に並べれば、聞き手が取捨選択して聞いてくれる。

基本的には、日本語の順序で英語の単語を並べても全世界で通じる。並べ替え問題は特にNSなら誰でも解ける。聞き手に並べ変えさせればいい。そこでは形態論の稿で述べたように、冠詞も三単現や複数のsも、助動詞のdoもbe動詞もたいてい省略されていい。さらに動詞など、すべて語幹を使えばいい。これは学習者中でも初学者にも、教える側にも大きな労力の緩和となる。さらにこうして互いが自由に母語の語順を使うことから始めると、副産物としてお互いの言語の語順を学び合うことができるという利点がある。このことは、自分の英語が通じないのではないかといぶかり、発話を恐れる日本人学習者たちに勇気を与えるだろう。

最後にアメリカ・インディアンの語順を見よう。

Whisky, me no take 'em, lemonade, me take, cowboys, whisky take.

語順とは、母語の順序で言いたいことをいうのが一番健康にいい。

参考文献

- Aitchison, J.M. *Linguistics*. Hodder and Stoughton 1978
- *The seeds of speech*, Language origin and evolution Cambridge University Press 1996
(J.エイチソン『ことば 始まりと進化の謎を解く』今井邦彦訳 新曜社 1999)
- 荒木一雄『コンパクト英語学概論』荒竹出版 1981
- Comrie, B., *Language Universals and Linguistic Typology: syntax and morphology*, Oxford: Blackwell 1981, 『言語普遍性と言語類型論：統語論と形態論』B.コムリー著 松本克己, 山本秀樹訳 ひつじ書房言語学翻訳叢書第1巻 1992
- Hilgard, Ernest R., Bower, Gordon H., *Theories of Learning*, (ヒルガード『学習の理論(下)』梅本堯夫監訳 東京培風館1988
- 本名信行編『アジア英語辞典』、三省堂、2002
- 石橋幸太郎編『現代英語学辞典』成美堂 1973
- 石黒昭博監修『総合英語Forest (フォレスト) 4th Edition』桐原書店 2005
- Jespersen, O. *Growth and structure of the English language*, University of Chicago 1982
- 北村達三『英語を学ぶ人のための英語史』桐原書店 1987
- 松本克己『世界言語のなかの日本語』三省堂2007
- 西垣内磨留美『英語の語順と文法』ベレ出版 2000
- レッドベター『その英語ワカリマセン』小学館、2007
- セイン, D. 『ニッポン人のへんな英語』日本文芸社、2005(セイン, D. 2005)
- 末延岑生他「日本人の英語」『人文論集』KUC31-1 1995
- 「ニホン英語」本名信行『アジアの英語』くろしお出版、1991
- 末延岑生「パタン・プラクティスの類型化研究」『language Laboratory』語学ラボレトリー学会 1968
- 『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書 2010
- 「ニホン英語(*Open Japanese*)をデザインする」『芸術工学2011』神戸芸術工科大学 2011
- 「ニホン英語(*Open Japanese*)の類型化研究(形態編)-アジア英語(*Open Asian*)を礎として」『芸術工学2012』神戸芸術工科大学 2012(キーワード:ニホン英語、類型化)
- Suenobu, Mineo *et.al* Listening Comprehension and the PIA Non-N. *Int'l Review of Applied Linguistics (IRAL)* 34-3 Heidelberg 1986
- An Experimental Study of IJE *IRAL* 1992
- Information Transmission *IRAL* 35-3 1997
- Suenobu, Mineo *From Error To Intelligibility*, Shubun International, Tokyo.199 pp.1988.8.
- *Communicability within Errors*, KUC Monograph LII, The Institute of Economic Research, Kobe University of Commerce, Kobe. 254 pp. 1995. 12.
- *Japanese English—A Study of Japanese Learners' Simultaneous Interpretation*, KUC Monograph LX, The Institute of Economic Research, Kobe University of Commerce, Kobe. 279 pp. 1999. 3.
- *Errorology in English*. Yugetsu Shobo, 740 pp. (bind copy), 2002.11.
- *Pathology of English Teaching in Japan*, KUC Monograph LXVIII, The Institute of Economic Research, Kobe University of Commerce, 226pp. 2003.3.
- 『ことばの元を探る—知恵と文字の仕込み』神戸商科大学研究叢書LXXI, 神戸商科大学学

術研究会232pp. 2004.3.

————— *The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH Monograph LXXVI, The
Institute of Economic Research, University of Hyogo, Kobe, 230pp. 2006.3.

田中春美[ほか] 編『現代言語学事典』成美堂 1988

角田太作『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語』くろしお出版 2009

安井稔 「英語」『平凡社大百科事典』平凡社 2001